

謡曲「木賊」の構想と東山道園原

安藤 常次郎

○まえがき

この論文は、謡曲「木賊」の舞台になっている東山道の園原や、それにつながる神坂峠を、出掛けて行って調べてから書くつもりであったが、締切日を間違えていたためにそれが不可能になり、やむをえず、著書だけを調べてまとめることにしたものである。

○「木賊」の梗概と問題点

まず謡曲「木賊」の梗概を述べながら、問題になる点を拾ってゆくことにする。ワキは旅僧であるが、従僧二人（ワキツレ）と一人の少年僧（子方）を伴って登場し、「信濃路遠き旅衣。信濃路遠き旅衣日も遙々の心かな」と次第を謡う。遠く信濃路へ出掛ける旅であることが示されるわけである。つぎの名宣では、「これは都の者にて候。又これに渡り候御方は。東国は信濃の国の人にて御座候。未だ父を御持ち候が。今一度御対面ありたき由仰せられ候間。我等御供申し。信濃の国へと急ぎ候」と言う。説明が

不十分であって、少年がどうして都の僧をたよることになったのか、その理由については述べていないが、それは後になってわかることになっている。

名宣のつぎは、「道あるや。旅の関の戸明け暮れて。旅の関の戸明け暮れて、宿はいづくと定めなく。行方も知らぬ身ながらも。伴ふ人は有明の。月日程なく木曾路経て園原山に着きにけり園原山に着きにけり」という道行謡になるが、都から信濃国園原までの旅にしては短か過ぎる文句であり、道行文に多く出てくる途中の地名も、「木曾路」が使われているだけである。しかも「木曾路経て」とあるのが、道筋をあいまいにしているのであって、これは問題点の一つであり、改めて取り上げることにしたい。

能ではつぎに、一声の囃子で老人（シテ）と里人三人（ツレ）が登場し、「木賊刈る。山の名までも園原や。伏屋の里も。秋ぞ来る。……」と謡う。「俳句大歳時記」（角川書店）に、「トクサは茎に多量の珪酸をふくみ、堅いため、これを塩湯で煮て、干して木材その他器物をみがくの用に用いる。収穫は茎の最も充実した秋がよく、昔は信州辺でこれを栽培し出荷したが、いまはその栽

培もすたれている……」とあるように、むかし信濃国は木賊の産地として有名であり、またそれを刈るのは、秋ことに晩秋が最もよいとされていた。なおこの「木賊刈る。山の名までも園原や」という文句は、源仲正の「木賊刈る園原山の木の間より磨き出でぬる秋の夜の月」(夫木和歌抄、卷二十、「山」の部)に基づくものと考えられるし、「園原や。伏屋の里も」というのは、坂上是則の「園原やふせやに生ふる帯木のありとは見えて逢はぬ君かな」(新古今集、恋歌一)に拠るものではないかと考えられる。その

わけは、仲正の歌も是則の歌も、後になって使われているからである。いずれにせよ信濃国も園原のあたりが、木賊の主なる産地になっていたのではないかと思われるのであって、本曲のシテのことばの中にも、「(前略)さりながら園原山の木賊は。名所と云ひ名草と云ひ。歌人も御賞翫なれば。手づから刈り持ち家菰と志し候」と言わせている。また伏屋や帯木については、是則の歌のほかにも、

帯木のころを知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな

(源氏物語、帯木)

数ならぬふせ屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帯木(同)

ははき木の梢やいづこおぼつかな皆その原はもみぢしにけり

(金葉集、秋歌、源師賢)

信濃のみさかのかた書きたる絵に園原とい

ふ所に旅人宿りて立ちあかしたる所を

たちながら今宵は明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり

(新古今集、羈旅歌、藤原輔尹)

などと多く歌に詠まれている。すなわち園原というところ、伏屋、帯木、そして木賊が取り上げられていたと考えられるのである。

ところで老人たちは木賊を刈りにきたのであるから、季節は秋ということになるし、仲正の歌を利用した「木賊刈る。園原山の木の間より。磨かれ出づる。秋の夜の月影をいざや刈らうよ」という文句もそれを示している。

さて木賊刈にきた老人たちがその木賊を刈り終わってから、それを見ていた旅僧は声をかけて、「この所に伏屋の森と申す森の候か」とたずねる。老人が「あれに見えたるこそ伏屋の森にて候へ」と言うと、僧はさらに、その伏屋の森には帯木という木があるかとたずねる。すると老人が、「御覧候へ梢に一木うすうすと思えたるこそ帯木にて候へ。帯草に似たる木にて候により。帯木と申し習はして候。これは寄生木にて候」と教えたので、僧が「園原や伏屋に生ふる帯木のありとは見えて逢はぬ君かな」という古歌についてたずねると、この辺から見ると見えるが、そばに寄ると見えなくなるからでしょうと答え、ただ今その証拠を見せましようと言って、僧を帯木のそばに連れてゆく。すると、

地へよそにては。正しく見えし帯木の。正しく見えし帯木の

蔭に来て見ればなかりけり。……

ということになるのであるが、この帯木のこととは作物を用いず、演技で示されるだけである。

ところで本曲には中入がないのであるが、内容的に考えてここまでが前段にあたる。そしてこの前段では、古歌に基づいて木賊

刈と掃木のことを取り上げているのである。さて老人は、この旅僧に親しみを感ずるようになって、「いかに御僧達に申し候。我等が私宅は旦過にて候。一夜をあかして御通り候へ」と言つて、旅僧たちをわが家に連れてゆく。この「旦過」という語が珍しいが、『大言海』には「たにくわ」として、「タニ来リテ、翌朝、行キ過グル意。禪家ニテハ、たにくワット云フ。行脚僧ノ宿泊スルコト。其処ヲ、旦過寮ト云フ」と説明し、そのあとに用例を挙げてゐるが、その用例は本曲のこの部分である。また『大字典』（講談社）では、「(仏)行脚僧の一夜を過ぐす所」と説明し、ある仏教辞典（三星社）も、「旅僧の一夜の宿泊所をいふ」と説明してゐる。そしていづれも発音は「たにくわ」である。こういう特殊な語を老人に使用させてゐるのは、相手が旅僧ということによるものと考えられるが、この「旦過」という語を用いることによつて、古い時代にあつたという布施屋を連想させようとしたものではないか、とも考えられるのである。

さてこれからは、老人の家である旦過の場面になるのであるが、この老人が僧たちを部屋に案内してから、しばらく座をはずした折に、ツレである里人の一人が、「今の耐殿は少し身に思ひの候ひて。時々は現なき風情の候。その時は心得あつて御あひしらひ候へ」と注意する。その物思いによる狂気じみた振舞が能としての眼目になるのであるが、その前提である身の上話を、座に戻つてきた老人がはじめる。「この耐は子を一人持ちて候を。行方も知らぬ人に誘はれ暮に失ひて候。若しも行方や聞くと思ひ。この路次に居所を立て。往き来の人をとどめ申し候。我が子の常

は小歌曲舞に好きて。友を集め舞ひ謡ひ候ひし程に。この耐も時々には舞ひ謡ひ候」とあるのがそうである。ところでこの中の「暮」を『謡曲大観』の口語訳では、夕暮の意味に解しているが、何年以前のいつごろの夕暮であるのか、それはわからないのである。そこでこれを去年の年の暮の意味にしたらどうか、とも思うが、それでは一年足らずのことになって、いかに出家姿であるとはいへ、わが子に気付かないというのがおかしくなる。詞章的に不十分といわねばならないのであつて、そのためか宝生流の現行謡本では、「行くへも知らぬ人に誘はれ失ひて候」と、「暮に」を削つてゐるし、喜多流も、「行くへも知らぬ往来のお僧に誘はれ失ひて候」となつてゐる。金剛流は、「往来の人に誘はれ暮に失ひて候程に」とあつて親世流の詞章に近い。おそらくこの「暮に」のはいつてゐるのが原形であらう。また子方が勤める老人の子を稚児の姿でなく、すでに出家した少年僧としてゐるのは、姿が変わつてゐるために父親が気付かぬ、という含みにするためであつたらう。

さて身の上話がすんでから老人は、「誰かある御盆を参らせ候へ」と声をかけて立ち去つてゆく。能では「物着」になるのであるが、後見座に行つて装束をかえる。その物着のあいだに少年僧が、「いかに申し候。只今の耐殿は我等が親にて候」と言い、ワキの僧が、では早速お名のりなさいと言つと、「いや暫く。思ふ子細の候へば。まづ知らぬ由にて御入り候へ」と言う。この「思ふ子細」がどういふことか、後になつても判明しないのであるが、要するにここで名のらせては、本曲の眼目であるこれからの

場面に、展開させにくくなるからであらう。

老人はふたたび座に現われて、僧たちに酒をすすめるが、飲酒は仏の戒めだからと辞退する。すると老人は、廬山の慧遠禪師が陶淵明の志による酒を飲んだという虎溪の故事を語り、「ましてや我が子の甑びし。舞曲の酒宴の戯れにて。老生を慰む志をば。などか憐み給はざらん」と言つてすすめる。酒宴をはじめること

によって、かつてわが子が舞うたようにわたしも舞うてみようと思つてゐるのだから、飲んで下さることがこの老人を慰めてやることになるのであつて、仏もその気持を憐れんで、飲むことを許して下さいましょう、という意味であらう。そこで酒宴になつて、あるじの老人も僧を相手に、自分も飲みながら親子の愛情について語つていたが、酔がまわつてくるとくどくなり、親は子と思うが、子は親のことを思つてくれないと愚痴を言う。ここがクリ・サン・クセと続く主要部分であるが、そのクセの後半の文句は、

シテへげにや人の親の。地へ心は闇にはあらねども子を思ふ道に迷ふとは。真なりや我ながらその面影の忘れぬ。昔に返す舞の袖。我が子はかうこそ舞ひしものを。この手をは。かうこそ指ししぞとて。左右に颯々の袖を垂れ。一つはまた酔狂も。まじると人や御覧ずらん。酔泣も子を思ふ涙とや人の見るべき。

というのであつて、酒宴の興として舞うてゐるうちに、わが子の面影がちらつき、酔も手伝うて気持が高ぶり、酔狂のような舞いぶりになつて、はては泣き出したりするのである。

作者がここを眼目にして構想したことは、まさに里人が旅僧に、「今の尉殿は少し身に思ひの候ひて。時々は現なき風情の候。その時は心得あつて御あひしらひ候へ」と注意していたことから考えられるのであつて、言い換えれば、酔狂癖・泣き上戸癖を持つ老人を取り扱うのが、本曲のねらいであつたと言ふことができる。そして、老人がなぜそういうことになるか、という理由づけのために、愛児に生き別れた淋しさを、飲むことで紛らわしていることにした、と考えたいのである。

本曲発想の動機は、こういう老人のことよりも、東山道園原という土地に対する関心にあつたとわたしは考えている。しかし脚色上からはこの部分が中心になつていて、こういう酔狂をする老人を取り扱つたことが、親子の再会を取り扱つた曲の中で本曲を特色づけているのである。そして老人の淋しい心と、秋という季節の淋しさ、東山道園原という土地の持つ淋しさが、本曲を淋しさで統一することになつてゐる。そこでこの園原のことについて考えてみなければならぬが、そのまゝに、本曲の梗概に結末をつけ、さらに本曲と「柏崎」との關係について述べておきたい。

クセのあととは序之舞になるが、この序之舞を演者たちは、どういう心持で舞つてゐるのであらうか。間違つてゐるかもしれないが、序之舞は静かなものであるから、酔い泣きをした老人が平靜な心の状態に戻つて、静かにわが子の舞を真似る場面と考えたい。そしてこの序之舞のあとでは、

地へ親ものに狂はば。子は囃すべきものを。シテへあら恨めしやた。地へ恨めしやた舞も歌も現なさも子故なれば老

の波の。あはれ立ち帰り今一目父に見えよかし。

と狂ったような状態になってかきくどくのである。そこで旅僧が同情して、「この上は。何かつまんこれこそは。別れし御子松若。……」と、少年僧を老人のそばに連れてゆくと、老の眼におぼつかなかったが、やっとわが子とわかり、「恨めしやなどされば。疾くにも名のり給はぬぞ」と恨みもしたが、逢いた喜びのほうが大きく、「こは夢か夢にても逢ふこそ嬉しかりけれ」ということになるのである。

劇の進行上からは、以上で終わるのが、親子再会ものの常套的構想である。しかるに本曲では他と異なつて、つぎの文句をさらに添えているのであつて、その理由を考えてみる必要がある。すなわちその文句は、

かくて親子に合竹の。かくて親子に合竹の。世をふるさとを改めて。仏法流布の寺となし。仏種の縁となりにけり。あとに伏屋の物語。浮世語になりけり浮世語になりけり。

というのであるが、これを『謡曲大観』では、「かうして、親子は再会し、これまで住み古した住宅を改めて、仏法を流布する寺とし、成仏の道に入る結縁の所とした。そして、この老人の死んだ後も、この地方の世間話として語り伝えられたのである」と訳し、頭注でも「伏屋の物語……」について、「僧に施す布施を伏屋にいひかけ、地名の伏屋と賤が伏屋とを兼ね、後々までも民間の話として伝えられたといふ」と説明している。

ところで観世流謡本では、「あとに伏屋の物語」とある「あと」に、「後」の字をあてているが、宝生・金剛・喜多三流では「跡」

の字にしている。すると、『謡曲大観』口語訳の「この老人の死んだ後も」ということでなく、昔ここにはこういうことから建てられた寺があったが、その寺の跡は伏屋の物語として残り、世間話として語り伝えられることになった、というような意味になりそうである。いずれにしても、この曲の内容である親子の再会を、遠い昔の話にしていることは疑いないのである。それでは事実そういう世間話が園原で語り伝えられていたのか、というのに、どうもそうではなさそうである。考えようによつては、昔ここにあった寺の縁起にこういう話があった、ということにもなるが、果たしてどうであらうか。信濃民芸研究会が発行している『信濃のはなし』（宮沢憲衡著）にも、「園原の帯木」のことは取り上げているが、こういう話は載せていない。ところで、辞書からの引用で恐縮であるが、『日本文学大辞典』に「ふせやの物語」というのが載つていて、その解説によると、成立は室町期で、明応八年以前の作とあるが、物語の名称については、「女主人公が信濃の伏屋の尼に救はれ、その庵室に保護せられてゐる許へ、夫の少将が尋ね到る物語なるにより、この題名がある」としるについて、この内容は謡曲「木賊」には関係のないものである。しかし古く『風葉集』に「ふせや物語」の名が見えるので、あるいは「古ふせや物語」があったのかもしれない、ということもこの解説に示されている。とすれば、この物語の名を知っていた謡曲「木賊」の作者が、その物語名だけを借用した、とも考えられるのである。いずれにしても本曲は、謡曲作者の創作と考えられるのであつて、佐成氏も『謡曲大観』の中で、

新古今集、坂上是則の歌

園原や伏屋に生ふる帶木のありとは見えて逢はぬ君かなに想を得、この地の名草木賊刈りを背景として創作したもので、この外に特に典拠と見るべきものはない。世阿弥が能作書に、「作能とて、更に本説もなき事を新作にして、名所旧跡の縁に作りなして、一座見風の曲感をなす」といった趣のものである。

と言っておられるし、作者については能勢朝次氏が『能楽源流考』の「謡曲作者考」の中で、「作者註文・古歌謡作者考・異本謡曲作者・謡目録・自家伝抄、共に世阿弥作として居る。世阿弥作と断じて良いであらう」と言っておられる。また曲柄については、佐成氏が同じく『謡曲大観』の中で、「父子の再会を描いた曲には、本曲の外に歌占、弱法師、花月などがあるが、その中で、父の愛の最も強く現れてゐるのは本曲であらう」と言っておられる。しかしわたしは、これらの曲よりは、むしろ女物狂ものの母子再会を取り扱った「柏崎」に、共通点を多く認めうるのであつて、あるいはこの「柏崎」に基づいて、世阿弥またはそのころの他の作者が、母子再会を父子再会の曲に作りかえたのではないかと考えているのである。

○「木賊」と「柏崎」との関係

越後国柏崎の何某が鎌倉滞在中に風邪が原因で死に、一緒に居たその子花若は歎いて、出家すると言つて出て行つてしまった。家臣の小太郎（ワキ）が柏崎に帰つて花若の母（シテ）にその事

を告げ、主人の形見と花若の文を渡したので、母は歎き悲しむ。以上が前段であり、後段の場面は信濃国善光寺。その善光寺に柏崎から狂いながら母が来て、亡き夫の烏帽子・直垂を着て弥陀讃仰の曲舞を舞うのを、この寺の僧（ワキツレ）と、この寺で出家している花若（子方）が見て、舞い終わってから名のと、母は夢かとばかり喜ぶ。

以上が謡曲「柏崎」の梗概であるが、主眼になっているのは、狂女が善光寺で弥陀讃仰の曲舞を舞う場面である。世阿弥の談話を二男元能が筆録した『申楽談儀』に、「又、鶺鴒・柏崎などは、榎並の左衛門五郎作也。さりながら、いづれも、わろき所をば除き、良きことを入れられければ、皆世子の作なるべし。今の柏崎には、土車の能世子作の曲舞を入れらる。」とあつて、「柏崎」は「土車」にも関係があるのだが、この両者の関係については、本論文では必要がないので述べない。いづれにしても共に善光寺を舞台にした狂乱物であり、そして「柏崎」が女物狂であるのに対して、土車は男物狂になっている。その「柏崎」や「土車」に対して、さらに老人の物狂を着想したのが「木賊」ではなかったか、と言いたいのである。そして同じく信濃国ではあるが、信濃国で最も賑かであつた善光寺でなく、美濃国に近い東山道筋のさびれた園原ということにした。そして園原で淋しく生活しているこの老人は、行方不明になったわが子がかつて舞つていたように、自分も子を偲びながら舞うのであるが、それは「柏崎」の狂女が善光寺に来て、亡夫を偲びながら舞うのに似ている。

シテへあらいとほしやこの烏帽子直垂の主は。よろづ何事に

つきても暗からず。(中略)また酒盛などの折節は。いで人々に乱舞舞うて見せんとて。鍔直垂取り出し。衣紋美しく著ないて。縁塗取^{へら}つてうちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り。鳴るは瀉の水。

と狂女が語って舞うのは、「木賊」で老人が、「我が子の常は小歌曲舞に好きて。友を集め舞ひ謡ひ候ひし程に。この耐も時々は舞ひ謡ひ候」と語るのに関係がありそうである。そして老人が舞の最後で、「恨めしやただ舞も歌も現^{うつ}なさも子故なれば老の波の。あはれ立ち帰り今一目父に見えよかし」とかきくどくのに対し、「柏崎」でも舞の最後で、「今の我等が願はしき。夫の行方を白雲のたなびく山や西の空の。かの国に迎へつつ。一つ浄土の縁となし望みを叶へ給ふべし」とかきくどくことになっている。そしてこのあとで善光寺の僧が、少年僧の姿になっている花若をひき会わせてやるのであるが、ここもまた「木賊」によく似ている。

ロギ^ハへ今は何をかつつむべき。これこそ御子花若と。言ふにも進む涙かな。シテへ我が子ぞと。聞けばあまりに堪へかぬる。夢かとはかり思ひ子の何れぞさても不思議やな。地へ共にそれとは思へども。変る姿は墨染の。シテへ見しにもあらぬ面忘れ。地へ母の姿も現なき。シテへ狂人と云ひ。地へ衰へと云ひ。たがひに呆れてありながら。よくよく見れば。園原や伏屋に生ふる帯木の。ありとは見えて逢はぬとこそ。聞きしものを今ははや。疑ひもなき。その母や子に逢ふこそ嬉しかりけれ逢ふこそ嬉しかりけれ。

——以上「柏崎」——

ロギ^ハこの上は。何かつつまんこれこそは。別れし御子松若と。言ふにも進む涙かな。シテへ誰そや我が子と夕月夜。おぼつかなしや何れさて。別れし我が子なるらん。地へ変る姿の衰へは。げにそれならぬ有様を。シテへよくよく見ればさすがに。地へ親なりけり。シテへ子なりけるぞや。地へ恨めしやなどされば。疾くにも名のり給はぬぞと。逢ふ時だにも恨みある。こは夢か夢にても逢ふこそ嬉しかりけれ。

——以上「木賊」——

両者を比較すると、詞章的にも後者は前者に基づいたのではないかと思われるし、また「柏崎」のこの詞章中に、「園原や伏屋に生ふる帯木の。ありとは見えて逢はぬとこそ。聞きしものを……」とあるのも、あるいはこれが「木賊」発想の動機になったのではないか、とも考えられるのである。

ところで、「柏崎」は右に挙げた文句で終わっており、「木賊」も事件としては同じく右の文句で終わっているが、前にも述べておいたごとく、「木賊」ではこのあとに、「かくて親子に合竹の。……」の文句を付け加えているのであって、ここに「柏崎」と異なる創意があったと言ふことができる。そしてその創意は、どこから生まれたものであろうか。わたしはそれを、所が東山道の園原であつたため、と言いたいのである。

○東山道園原

『延喜式』卷二十八に東山道の駅馬・伝馬のことをしるした箇所があるが、そこに見える東山道の国は近江・美濃・飛騨・信

濃・上野・下野・陸奥・出羽である。その中で美濃国の箇所に見える坂本と、信濃国の箇所に見える阿知との間が神坂峠を越えて園原に出る道にあたっている。吉田東伍博士の『大日本地名辞書』には、美濃国恵那郡坂本郷のことを、

和名抄、恵那郡坂本郷。○今坂本村、中津町及び落合村なり、竹折郷の東にして、古の神御坂の下なれば此名あり。……坂本郷は東山道の旧路、信州伊奈を通過せる時の山店とす。……と

している。また阿知は現在、長野県下伊那郡阿智村となつてゐるようであり、園原は、毎日新聞社長野支局編『信濃の宿』に拠ると、下伊那郡阿智村園原ということになっている。ところで、『延喜式』に「信濃国馬。阿知三十疋。育良。賢維。宮田。深沢。覚志各十疋。……」とある阿知が、今の阿智村のどの辺にあったのかはつきりしないのであるが、同じく阿智村に属している駒場について、「岐阜県中津川市から、神坂峠を越えてくる旧東山道と、三河・信州間を結ぶ三州街道が一緒になっていた」と『信濃の宿』がしるしており、この駒場が昔の阿知駅であったのではないかと考えられる。なお明治四十年ごろの出版である『大日本地名辞書』では、駒場、阿智、園原、科野御坂などが、いずれも伊那郡の箇所にはいつているが、その解説の中につきのような記事が見える。

○駒場—今会地村と改む。飯田の南西南三里、波合（参州路）小野川（美濃路）の両山道此に分岐す、又西北は清内路へも通ふべし。……

○阿智—古の信濃坂の下なる大駅にして、延喜式、阿智駅三

十疋とあるは、山道險遠なれば、特に多数の馬匹を備へられたる也。……

○園原—今小野川の谷にて、古駅路にあたり、布施屋を置て行人を留宿休止せしめたる所とす。（中略）往昔水陸の難路に於て、慈悲の旨を体して、旅人を救済する伏舎を、すべて布施屋と云へり。（中略）又云、簪木のある山のうしろに伏屋といふ小村もありとぞ、古歌の詞を今は里の名とせりとおもはる。……

○科野御坂—又神御坂と云ふ。本国本郡と美濃恵那郡の界嶺にして、恵那嶽の下を経由せる者也。此古道中世以降降したるを以て其經由の跡稍分明を欠く。美濃には坂本駅（千旦林）信濃には阿智駅（駒場）ありて、実に山路東西の亭舎たるを想へば、其大略を会得し難からず。而も古路は恵那嶽の南を繞りたるにや、又其北を過ぎしにや。甲陽軍伝解に「伊奈郡小野川の関の奥は苑原通り妻籠へ出づ」と論ず。されど諸書に其古路は苑原通り妻籠へ出づと云ひ、或は千旦林より小野川へ出づと云ひ、稍紛紜あり。今園原と西筑摩郡（古の恵那郡内）馬籠の湯舟沢との間に峠ありて、標高一千五百米突、之を御坂とも唱ふ。蓋古路の由れる所とす。……

以上の文によると、吉田博士も駒場を昔の阿智駅と考えておられたようである。しかし坂本駅から阿智駅にいたる途中の山道については、どの道筋であったのか決めかねておられるのである。なお『延喜式』に見える阿知のつぎの「育良」については、「延喜式の駅名にして、阿智と片桐の間なれば、正しく今の飯田町に

あたる」とあり、「賢鑑」は片桐、「宮田」は現在も宮田、つぎの深沢については、「今中箕輪村の沢と云ふ大字は、蓋深沢の遺唱にや。沢より小野を経て、筑摩郡へ越ゆる山道あり。又近世の伊奈路は沢より岡谷、下諏訪へ向ふ。其位置の便宜を想ふべし。然れとも地名考には、岡谷の辺の三沢を以て深沢にあてたり。猶考ふべし」とある。さらに覚志以下のこれに続く地名を調べてゆくと、東山道の信濃国における道筋がわかつてくるのであるが、これについては藤森栄一氏の『古道』（学生社）から引用させてもらうことにする。

十世紀へ入って、『延喜式』によれば、東の山道は、さらに、はつきりした形をとってくる。すでにその駅停の名もはつきりし、その古地名を道路ぞいにたどることによって、復原できる。天竜川の右岸、つまり竜西を、神坂から、阿知―育良―賢鑑―宮田―深沢と通って、善知鳥峠をこえ松本市へ出、覚志―錦織と東南信の中梁山脈の保福寺峠をこえ、小県の浦野―日理、千曲川へ出て、清水―長倉、碓氷峠をこえて坂本という経路をたどり、また、錦織からは越後路が別れ、麻積から冠着をこえて更科の日理にでて、多古、沼辺と通って越後國境にいたっている。

謡曲「木賊」で、シテとツレが登場してすぐ謡う一声のつぎのサシは、「面白や所は鄙の住居なれども。げに名所の故やらん。山野の眺めも気色立つ。木曾の御坂の稍より。浮かむ雲間の朝づく日園原山に映るひて。木賊刈る野の。青緑。草の袂もなほ深し」であって、ここに「木曾の御坂」という地名が出てくる。

『大日本地名辞書』によると、西筑摩郡馬籠の箇所に、「今神坂村と改む。蓋木曾の御坂の義歟。然れども神の御坂、一名科野坂の古跡にはあらず。木曾谷の南門にして、州界十石峠を去る半里、恵奈岳の正北にして、木曾川の岸に近し。……」とあり、また「千曲真砂云、馬籠峠古名木曾御坂と曰ふ。……」とあるが、馬籠峠では園原から遠すぎるし、間に神坂峠もあって、「木曾の御坂の稍より。浮かむ雲間の朝づく日園原山に映るひて」ということにはならない。すなわちこの「御坂」は神坂峠のある神坂のこととしなければならないが、本曲の作者は、両者の区別を知らなかったのではなからうか。つぎの下歌・上歌の部分にも、

下歌、^{下歌}牡鹿鳴く野の行方まで妻や籠りし園原の。上歌、^{上歌}所は信濃路や。所は信濃路や。木曾の棧道^{かたて}かかる身の。……

などとあって、後に中山道となった木曾路の妻籠にひっかけて、同じ道の名所になった棧^{たはし}にひっかけてたりしている。要するに、神坂峠を越えて園原に出る道と、木曾路と現在いわれている道とを混同しているのであって、「木賊」の作者は、この両道のことをよく知っていなかったのであろう。

ところで、『延喜式』における東山道では、美濃国と信濃国との間に飛騨国が出てくるが、この事について藤岡謙二郎氏は『国府』（吉川弘文館）の中で、「飛騨路は東山道のうち、美濃国の現各務市のある各務駅かまたは現美濃加茂市の加茂駅から分れて支路を形成していたものと考えられる」と言い、そしてそのあとに、

飛騨国へ支路を発した東山道は美濃の武儀・加茂駅から恵那

山地を越えて、さらに木曾谷を東行、もう一つ木曾山地の神坂峠(五九五)を越して天竜川の伊那谷に出で、現飯田市を北上して信濃国府に達した。いわゆる木曾路の開さくが完成されるのは和銅六年(七一三)七月で、「美濃信濃二国之堺。径道險隘。往還艱難。仍通_三吉蘇路」(和銅六年戊辰の冬)(続日本紀 卷六)とある。

と言っておられる。すなわち和銅年間以前に神坂峠越の東山道があり、そして和銅年間に今の木曾路である東山道(後の中山道)が開かれた、ということになるが、この神坂峠越の旧道については、藤森栄一氏も『古道』の中で、「神坂峠が、人間の通路として歩きはじめられたのは、おそらく縄文時代も前期には、確実にさかのぼることができるだろう。(中略)倭建命の旅路の科野坂トノノサカというのは、ともかくとして、神坂峠が、幹線道路として都と東国を結んで、重要な役割をはたすようになった最盛時は、古墳時代の中・後期からと思われるふしがある」と言っておられる。そして園原は、この神坂峠を越えた所にあつたのである。

東国への道には東海道もあったが、古くは東海道よりも東山道の方が多く使われていた。それは、河川の多い海道筋を河口付近で渡らねばならぬという悪条件に原因するものと考えられているが、田名網宏氏の『古代の交通』(吉川弘文館)の中に、

ところが、浮橋・渡船もしだいに整えられ、治水もある程度行なわれるようになると、東山道の「道路多險タケ」に対しては、東海道の交通阻害の度が減じるにいたつたのであろう。

こうして、天禄二年(九七一)のころともなれば、東海道が陸奥・出羽への路次としてとられるようになったのであろう。

とあるように、東海道が具合よくなると共に、東山道のはうは次第にさびれていったのである。しかもその中でも神坂峠のあたりは、最も厄介な箇所であつたが、その神坂峠につながるさびれたのひどい園原を、謡曲「木賊」の舞台として取り上げていることに、とくに注意する必要があるのである。

○伏屋と布施屋

ところで「木賊」の内容となっている話の時代を、いつごろと考えたらよいのだろうか。それを示している文句がないので決めるにいくのであるが、「園原注9やふせやに生ふる帯木のありとは見えてあはぬ君かな」という『新古今集』に見える歌について、ワキの僧が「古言の思ひ出でられて候」と言っていることや、キリに「あとに伏屋の物語。浮世語になりにつけり」とあつて、この親子の再会話を古い昔のことにしてゐる点などから、鎌倉時代の半ばごろと考えてみたかどうか、と思考するのである。『園原や……』の歌の作者は坂上是則で、この人の歌は『古今集』にも見えているから、平安時代も半ば以前の人である。しかし謡曲の作者はそこまで問題にしたわけではなからう。また鎌倉時代の終わりのころの話ということになると、謡曲の作られたのを室町時代のはじめごろと考えた場合に、年代がくつき過ぎるのである。そこで鎌倉時代の半ばごろと考えてみたのであるが、このころはすでに東山道園原のあたりは、かなりさびれていたのでなからうか。

『大言海』では「伏屋」について、「屋根ヲ地ニ打伏セタルガ如キ低キ家。賤民ノ家」と説明し、そのあとに『万葉集』や『千

載集』の歌の用例を挙げているが、またそのつぎに、「布施屋・臥屋」という語を挙げて、これでは、「王朝時代ニ、駅路ノ諸所ニ設ケタル、行旅者ノ接待所、又、無料宿泊所。（飲食ヲモ供ス）官立アリ、私立アリ。」と説明し、『行基年譜』や『類聚三代格』に見える承和二年の用例を挙げている。この『類聚三代格』の用例については、『古代の交通』（前出）の中でも問題にしている、「承和二年（八三五）には、東海・東山両道の要路にあたる美濃・尾張両国界の墨俣川の兩岸に布施屋を設け、救急箱を備え、貢調の担夫らが、日を累ね旬を経ても渡河できず、斗乱によつて身命を被害するなどのことがないようにとその対策を講じた」としている。そしてこれは河川の場合であるが、山間の險路の場合にも布施屋の設けがあったと考えられるのであって、吉田博士が『大日本地名辞書』の「蘭原」の箇所で、「今小野川の谷にて、古駅路にあたり、布施屋を置きて行人を留宿休止せしめたる所とす。布施屋とは蓋最澄法師の置ける広拯院の類ならん、往昔水陸の難路に於て、慈悲の旨を体して、旅人を救済する伏舎を、すべて布施屋と云へり」と述べておられるのがそうであろう。この広拯院については、同書の「阿智」の箇所にも、

○奇勝「覽云、大同年中、最澄法師衆生化導の爲めに、東國に下り、美濃信濃の嶮を過て、山中旅店稀なるを歎き、二院を建てて行人を援く。其事は釈書に「大師置阿院、陟黝有便、美乃境内、名広済、信濃境内、名広拯」と見ゆ。広拯とは駒場長岳寺其古跡なるべし。

とある。この駒場に近い園原にも、果たして布施屋があったかど

うか、一応は疑つてみなければならぬが、東国から来れば神坂峠の入口に近いし、都から来れば神坂峠を越えてきて草臥れ切つているときであろうから、園原に布施屋があったら、旅人はさぞありがたいことであつただろう。それは立派な建物であることを必要としないのであつて、「屋根ヲ地ニ打伏セタルガ如キ低キ家」（前出）であつても差支えなかつただろう。そして園原にも布施屋になつてゐた伏屋があつたので、その部落に伏屋という地名がついたのではあるまいか。なお「信濃のはなし」（前出）の中には、「阿智村園原はむかし神坂峠を越えて美濃国に出る宿場で、旅人のため伏屋を設け、休息させたので伏屋の里とも呼ぶ」としている。「木賊」のシテである老人が、わが家を且過にしていることにしたのも、こういうことから思いついたのであるが、布施屋とは言つていない。それは布施屋のあつた時代よりも後のこととしたためではなからうか。キリの文句の中に、「世をふるさとを改めて。仏法流布の寺となし」とあるのも、あるいは最澄の広拯院のことからの着想であつたかもしれない。

ついでに伏屋の帯木のことにも触れておきたいが、いったいいつころ、どうしたことか、この言い伝えが生じたのであろうか。それを調べることも、また一つの研究になりそうだが、本文には必要のないことであるから、それはやめて、現在その木はどうなつてゐるか、ということについてだけ、『信濃の宿』（前出）の記述を借用することにする。

（前略）

さらに園原を有名にしたのは月見堂から神坂峠へ登る途中に

あつた箒木という大木。平安時代から「箒木」とは美濃・信濃の両国の境に其原（園原）ふせやと云所にある木なり。遠く見れば箒を立てたるようにて近くて見ればそれに似たる木もなし」（源氏物語）といわれた。「園原やふせやにおふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かな」（坂上是則）―愛を求める男が居留守を使った女への恨みを箒木に託すほどその名は有名だつた。

周囲六メートル、高さ二二メートルもの大木は伊勢湾台風で倒壊、いまは無残にも根本だけを風雨にさらしている。

○「木賊」構想の順序

さていよいよ、今まで述べてきたことに基づき、本論文の主眼とするところをまとめてみようと思うのであるが、以下はすべて勝手な私見であるから、大いに批判の対象になることであろうと、実はそれをたのしみに行っているのである。

「木賊」の作者が世阿弥かどうか、それを確かめることはできないが、そのころの人であつたかもしれない本曲の作者は、今は淋しい辺地になっているが、古歌その他で有名な信濃国園原という土地に関心を持っていた。行ったことはないが、東山道の中で最も険難の山坂を越えた所にある、とも聞いている。東海道の往来が賑かになると共に、ここは次第にさびれたようだが、帯木、布施屋、木賊刈などの言い伝えを残しているこの園原を舞台に、淋しい情趣を持った曲を作つてみたかどうかであらうか。その情趣を致させるためには、シテを淋しい境遇の中に生きている老人

としたい。それは、愛するひとり子に生き別れたためとする。そして淋しい毎日を、老人は酒で紛らわしているのだが、それには相手がほしい。しかし酔がまわると、さかんに愚痴が出るし、果ては泣き上戸になるので、土地の者はこの老人を敬遠するようになった。そこで、相手はしさと、別れた子の行方がわかることもあらうかと、この老人は、わが家を無料宿泊所にするを思いついた、ということにする。この着想は、むかし園原には布施屋があつたといわれているので、もってこいである。そして泊めてやつた旅人に酒をふるまい、その相手をしながら、身の上話をするのが、この老人の憂さばらしになっているのである。

園原に住むそういう老人を取り扱つてみようと考えた作者は、構成・脚色をどのようにするかという段階になって、抛りどころを、同じく信濃国の善光寺を舞台にした「柏崎」に求めることにした。そして、亡夫を慕うて狂つたかのように舞う女を、わが子を慕うて狂つたかのように舞う老人にかえた。しかもこれを酔狂ということにすれば、珍しいものになるだろう。ワキは東山道の旅をする都の僧にすればよい。その旅は、自分の弟子にした少年が、信濃国の父に会いたがためのものである。そして少年は、園原で父に会うことができるが、父のほうから、はじめはわが子に気付かない、ということにしなければならぬ。そのためには、「柏崎」の子女がそうであるように、本曲の子女も少年僧の姿で登場させる。ところで「柏崎」の主眼点は、狂女が亡夫を偲びながら、狂い舞うところにあるが、本曲も、老父がわが子を偲びながら、酔が手伝つて狂うたように舞うところを主眼点にする。し

かし「柏崎」では、狂女が狂いながら柏崎から善光寺までやってくる場面が、また一つのねらいになっている。そこで、それに相当するものとして、園原で有名な帯木と、これも歌に詠まれている木賊刈を取り入れた場面を設ける。すなわちシテの登場を、老人が仲間と共に木賊刈をしにきたことにすれば、季節も秋ということになって、本曲のねらいである淋しさに一致する。そして木賊刈をさせたあとで、老人が旅僧を、伏屋の帯木に案内することにすればよい。その事から親しくなつて、旅僧たちをわが家に連れてくることにする。そのようにすれば、園原に關係のある木賊刈も帯木も、布施屋のことも取り入れたことになるだろう。

このようにして本曲の構想が具体化したのであるが、作者はさらにこの親子の再会を、土地の者が語り伝えている昔の物語、ということにした。それは、むかしの布施屋に似た無料宿泊所が現在もあるかどうかかわからないことによるとも考えられるが、そうすることによって、さびれている園原の感じと一致することになるとも考えたからであろう。なおわが家を寺にしたという着想の抛りどころについての私見は、まえに述べておいたとおりである。

○あとがき

園原をまだたずねていないことを、わたしは「まえがき」でことわっておいたが、実は能の「木賊」も、まだ見たことがないのである。見ると、さらにいろいろ気付くことがあるかもしれないが、見たために、このわたしの懐古的な空想がこわれてしまいそ

うな気もする。情趣的な夢のままにしておいたほうがよいとも考えられるのであるが、園原という土地も、あるいは、たずねてがっかりするのかもしれない。たびたび引用して恐縮であるが、もう一度『信濃の宿』の文章を借りることにする。なおこれは、昭和四年七月に第一刷を発行したものである。

飯田線、中央線が開通、大平、三州街道も車が通るようになって、さびれた園原も中央道恵那トンネルの入口になるというわけで、再び脚光を浴びた。しかし、高速道は園原を通過するだけで、住民にはあまりプラスではない。かえって十三戸が道路建設のため立ちのきを要求された。狭い谷間のこととて里には代替地もないと行先きに悩む始末。

「世の中が開けると必ず気の毒な人ができましてなあ」——宿のおばあさんのことばがいたく心に響いた。文明への痛烈な皮肉である。

(昭和四十六年三月一五日稿成る)

注

1 観世流現行謡本に拠る。以下同じ。なお本曲は流儀によっていろいろ詞章の違いが見られる。また金春流では最近まで廢曲にしていたので、数年前、桜間道雄氏が復活上演したことはあるが、まだ謡本を見ていない。

2 喜多流では「この園原山に伏屋の里と申すはいづくを申し候ぞ」となっていて、「伏屋の森」とは言っていない。

3 観世・喜多二流では「たんぐわ」、金剛流では「たんくわ」、宝生流では「たんか」と謡本に読み仮名をつけている。また『謡曲大観』の頭注には、蘇東坡の「身是雲当且過僧」とい

う句を挙げている。

4 喜多流では、このツレのことば以前に、シテの老人が身の上話をする事になっている。

5 この中津町は、明治二二年に中津川町となり、同二七年には市になった。

6 『延喜式』は、日本古典全集のものに拠る。

7 謡曲では本曲のほかに「寝覚」・「巴」にも、「信濃路や。木曾の御坂の春風に。……」とか、「旅衣。木曾の御坂をはる

ばると」などと使われている。

8 この引用文の載っている前頁に挙げている橘時舒の解の中

に見えるもの。(『古代の交通』六三頁)

9 この歌の前書に「平定文家歌合に」とある歌合は、延喜五年四月二十八日で、題は「不_レ会恋」——『窪田空穂全集』中の「新古今和歌集評釈」に拠る。——なお窪田先生は「ふせやに生ふる」を、語釈で「布施屋の近くに生えている」と述べておられるし、また、「帯木」が源氏物語の巻の名になったのもわかるように、この歌は「魅力ある歌であったと見える。」とある。

10 坂上是則については、『和歌文学大辞典』に、『生没年未詳。醍醐天皇頃の人。……』とある。

新刊紹介

岡 一男著 『古典逍遙——文芸

学試験——』

昨年十一月にめでたく古稀を迎えられ、今年三月に本学を停年退職された岡一男博士の、『古典と作家』・『古典の再評価』に続く、第三論文集である。前著におさめえなかった諸論文に、新稿を加えた、平安朝から近代にわたる作品論・作家論・文学史論等の五十篇を、二十三章に分けて集録している。

既に博士の古典研究、特に源氏物語研究は、敢て紹介するまでもないが、本書所載の竹取・伊勢・源氏物語、歴史物語、徒然草あるいは小町・紫式部・赤染衛門・芭

焦・西鶴に関する諸論文でも、文芸科学・純粹文芸批評を縦横に駆使した碩儒の姿が見られることは言うまでもない。特に本書には、これまでの二論集には掲載されなかった。晶子・空穂・茂吉・五十嵐力、あるいはウヰリー・モリス等の近代の文壇・学界における巨匠に関する論考が収められ、その柔軟な視点と方法に驚愕すると共に、岡学の新鮮な魅力に俘虜にされるはずである。

〔昭46・4、笠間書院刊、A5判五七〇頁、定価六〇〇〇円〕

山岸徳平・岡一男監修

『源氏物語講座』 第一巻

——主題と方法——

いまだかつてない規模で企画された本講

座(全八巻、別巻一)には百余名の昭和の源氏学者たちが総動員され、その成果は、現代における源氏学の到達点と未来への研究の指針とを示すことになるであろう。本巻には、岡一男「源氏物語の主題」三谷邦明「源氏物語における虚構の方法」今井卓爾「源氏物語の創作態度」中野幸一「源氏物語における草子地」海老沢秀直「源氏物語の精神分析」のほかに上坂信男、井上英明、清水好子、小町谷照彦、三谷栄一、野口元大各氏の諸論を収録。専門家のみならず、広く一般読者にも一読をすすめた

い。

〔四月より毎月刊行の由。B6判。九八〇円、有精堂刊。〕